重い想い

329LI5.3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
重い想い

【Ｎコード】
Ｎ７７６９Ａ

【作者名】
３２９ＬＩ５．３

【あらすじ】
俺と依子の想い。恋愛感情なんてなかった。だけど、淋しいのは何故だろう。

（前書き）

関西弁です。分かりづらい言葉とかありましたらスミマセン。

重い。
重い。

「じゃぁまた明日！バイバイ！」
黒髪が夕日に当たって輝く。
「おぅ！」
ふらふらと手を振り、俺は彼女を見送った。
空はもう、綺麗にオレンジ色に染められていた。

「あれが新しい彼女？」
ふと、声がした。
声の主は、俺の元カノ、
日暮　依子。
「…なんやねん。文句でもあるんけ？」
俺は少し不機嫌そうに言った。
なんで、声なんか掛けるんだよ。
そんな気持ちを込めて。

それなのに
「別に？」
だなんて、全然効いてない。

「可愛らしい子ォやん。なんなん？趣味変わったん？」
ケラケラ笑いながら、依子は言う。
だって依子は金髪で、スカートも短い。
今時の女子高生だ。
それと正反対に、今の彼女は、黒髪で長めのスカートで、お嬢様みたいだ。

「いいやろ、そんなん。
チャラ子より、お嬢様のがいいしな。」
はっと鼻で笑う。
依子はそうやな、と笑った。

「お嬢様はいいけどさ、あんたが釣り合うんか？」
また笑いながら依子は俺を見た。

「俺はどうせ不良ですよー。」
少し睨んでその場に座った。
依子は、俺の隣に座った。
少し距離を空けて。

「はやいなぁ、彼女作るの。さすがやわ。」
前髪をいじりながら、そのまま目だけをこちらに向けた。
「まぁな。」
俺は目を逸らした。
「…」
「…あ、何？ヤキモチですか？」

意地悪に笑ってみせた。
「…は？…あぁ、ヤキモチねぇ…。今正味やかんかったわ、ごめん。」
真剣な顔して依子は頬杖をついた。
「ぁはっ…なんやねん、それ。」
俺は苦笑して後ろに手をついて、夕日を見た。

「だってさ、別に恋愛感情なんて無かったもん。」
笑いながら言う。
そうやろ？と、こちらをすっと見つめ、同意を求めてきた。

…確かにそうかもしれない。
恋愛に興味があって、付き合ってみただけで。
別に好きじゃなかったのかも。

俺は急に心が淋しくなった。
依子は相変わらず無表情に髪をいじっている。

「淋しいなぁ、俺ら。」

下を向き、膝に顔を埋めて、横目で依子を見た。

俺は驚いた。

「…ょ、依子？」

「…ぁ？何よ。」
「な…んで…泣いてるん？」

泣いてた。
依子が。
無表情のまま、目から涙をぼろぼろ落として。

「さぁ。なんでやろうね。」
そのまま目を細めて笑うから、目に溜まった涙が全部零れた。

「なんか…今までの事、ヤキモチもやかれへん今のままやったら…全部忘れそうやと思って。」
依子がまた笑う。
「…。ヤキモチもやけんくせによう泣くわ。」
「え？」
依子が目を丸くした。
「後悔してるんやろ、それ。」
俺はまた上を向いて笑う。

「そうかもせぇへんな。」
ニコリと依子が笑った。
「これちょうだい」
そう言って、俺の左手から、リストバンドをするりと取り上げた。
「は…？！」
「これあげるし！な？」
言いながら自分の髪止めを外して、俺の前髪に止めた。
鉄製の髪止めは前髪には重たい。
「重いんですけど…」
「気にしたら負けやで！」
依子はそう言ってリストバンドを左手に付けた。

「なんでそんなもん欲しいん？」
俺は重たい髪止めを手で押さえながら言った。

「思い出欲しかってん。」

「なんで？」

「忘れへんために。」

依子は少し真剣な声で言った。

「第二ボタンは彼女さんのために残しとかんなあかんしね。」

クスクス笑って依子は立ち上がった。

「…そっか。」

依子は歩きだした。

「んじゃ」

少しづつ歩みを速めて、そして走り去った。

「重い」

彼女が消えた瞬間、

半ばぶら下がっていた髪止めがするりと

落ちた。

彼女の何かしらの重い想いが、消えたのかもしれない。

ＥＮＤ

（後書き）

初投稿です。　内容が伝わりにくくてスミマセンです；；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7769a/

重い想い

2010年12月23日14時01分発行